

ヘーゲル『精神現象学』 「序説」 第11節～第13節の解明

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

67

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

26

(発行年 / Year)

2013-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009432>

ヘーゲル『精神現象学』「序説」 第 11 節～第 13 節の解明

山 口 誠 一

本論考は、『精神現象学』「序説」の「Ⅰ 現代哲学の課題」の「〔3〕原理は完成ではないこと、形式主義に対する反対」の前半部を扱う。ここでは、『精神現象学』とりわけ序説執筆時のヨーロッパの歴史との関係が簡潔に語られている。

『精神現象学』「序説」は、本文と違って、1806 年 8 月の神聖ローマ帝国崩壊そして 10 月 13 日のフランス軍のイエーナ占領掠奪の後に書かれている。執筆場所もバンベルクとイエーナの両地にまたがっていると推測される^①。いずれにしても、キリスト教権力を背景とする神聖ローマ帝国の崩壊と、ドイツの統一へとつながるフランス軍侵攻とに象徴される世界史の形成陶冶に学の体系を組み込むのが序説の役割ともなった。

〔3〕 原理は完成ではないこと、形式主義に対する反対

《第 11 節》

(1) 現代は新たな時期誕生の過渡期である。

Es ist übrigens nicht schwer zu sehen, daß unsere Zeit eine Zeit der Geburt und des Übergangs zu einer neuen Periode ist.

ところで、現代が誕生の時代であり、新たな時期への過渡期であることを見てとるのは、むずかしいことではない。

《註釈》『精神現象学』「序説」を執筆していたのは、1806 年末から 1807 年はじめあたりと推察される。この過渡期は、政治史の上でもっとも鮮明である。1806 年 7 月にナポレオンに後押しされてライン連盟が成立し、それが引き金となって、8 月には、962 年以来続いてきた神聖ローマ帝国が崩壊した。10 月のイエーナ会戦に敗れたプロシアは、シュタイン・ハルデンベルクの改革へと進んだ。その流れは、1815 年のドイツ連邦へと結実してゆくのであった。『精神現象学』「序説」は、イエーナ会戦後の混乱の中で生まれたのであった。そして、この混乱について、ヘーゲルはバンベルクへの旅行途次に、1806 年 11 月 17 日、フロムマンに報告を送っている。「旅行の全日程において、わたしはフランス人からたっぷりと自慢話（！）を聞かされました。毎日、人々は穀物、藁、干し草、その他の家事用の身の回り品

のなかからわずかのものを利用したり、同じ行為をいつも繰り返すという退屈なことをやらざるをえないわけですが、彼らフランス人は、いたるところで人々にそうした退屈さをまぎらわしてくれたというのです。このぐずぐずした国民がそのために普段ならば数年数月かかるところを、フランス人は1日でなしとげました。しかしながら、人間が仕事なしでいることはよくないことですから、彼らは人々に、家々を新たに再建したり、いまや家々をより近代的に整えることができるための仕事を残してくれたのです」⁽²⁾。こうしてヘーゲルにとってこの混乱は崩壊と誕生の過渡期なのであった。

(2) 精神の過渡期とは、過去との絶縁と再形成への始動である。

Der Geist hat mit der bisherigen Welt seines Daseins und Vorstellens gebrochen und steht im Begriffe, es in die Vergangenheit hinab zu versenken, und in der Arbeit seiner Umgestaltung.

精神は、その現存についても表象作用についても、いままでの世界と絶縁して、それを過去へ埋めようとしており、自分を形成しなおす仕事にとりかかろうとしている。

《註釈》 当該の文で、精神の過渡期とは、精神がいままでの世界と絶縁し、それを過去に埋めると、精神の再形成への始動という両面を持っていることが判明する。前者の世界とは、まず精神が現に当時居合わせていた世界であり、(1)の政治史が典型的には含まれる。つぎに精神の表象作用ということ、ヘーゲルのいう概念把握作用とは区別された実体知のありかた全般を意味している。こうして、ここでは、ヘーゲルは、過去と絶縁し、主体的精神の未来に目を向けている。神聖ローマ帝国の世界から、ドイツ連邦へと再形成しようという精神は、また、実体的表象作用とは絶縁して、主体的概念把握へ始動しようとしている。

なお、精神の現存と表象との関係については、序説第 31 節で詳しく説明されている。現存とは感覚的で個別的な存在のことであるのに対して、表象とは、現存を自己の表象作用が揚棄して普遍的になってはいるが固定されているのでいまだ現実性を持っていない。表象は見知られてはいるが概念把握されていないのである。ただし、ベルリン期には、ヘーゲルは、表象を二種類に大別している (GW20, §20, Anm.)。まず、内容は思想に属しているが形式は思想に属していない場合がある。その例としては、法や道徳や宗教の神という表象がある。神の内容の源泉は思考であるが、形式は感覚的であって普遍的ではない。反対に形式は思想に属しながら内容は思想に属さない場合がある。その事例としては、怒り、薔薇、希望という表象がある。これらの素材は感覚的に知られ与えられているが、それらを思想の形式で表現している。『精神現象学』で、現存から表象への移行が問題になる際には、後者の表象が意味されている。しかし、学の形式と宗教の形式が問題になる際には、前者の表象が意味されている。

(3) 精神はつねに前進しようとする。

Zwar ist er nie in Ruhe, sondern in immer fortschreitender Bewegung begriffen.

なるほど精神は、決して休止しようとすることなく、つねに前進しようとする運動する。

《註釈》 正確にいうと、精神は、回転する軸という静止点を中心に螺旋運動をする。その螺旋運動が

円周を前進するとされるわけである。

(4) 精神の前進には飛躍がある。

Aber wie beim Kinde nach langer stiller Ernährung der erste Atemzug jene Allmählichkeit des nur vermehrenden Fortgangs abbricht- ein qualitativer Sprung- und jetzt das Kind geboren ist,
けれども、そこには子どもの出生におけるのと似たような事情がある。胎児として長いあいだ静かに養われてきたのち、質的に飛躍する。ただ量的にのみゆっくりと増加してきた進展を中断して、いま子どもが生まれでている。

《註釈》 ここで、ヘーゲルは、量的でしかない前進から、質的飛躍を含んだ前進を区別しようとしている。受胎からの胎児の量的成熟と新生児という質的飛躍が語られている。質的飛躍というのは、胎児という質を新生児という質が否定するからである。胎児の成熟は、量的増加であって、胎児の質を否定しないが、やがて質の否定につながってゆく。しかし、一人の人間の一生が円環運動になっているかどうかは定かではない。ヘーゲルは、死は、その人の完成であるとはいっている。「死は、個人そのものが引き受ける共同体のための完成であり、最高の仕事である」(Phän. S. 296)。

(5) 精神は新たな形態へとゆっくりと静かに成熟する。

so reift der sich bildende Geist langsam und stille der neuen Gestalt entgegen,

ちょうどそのように、精神は、自己を形成陶冶する場合にも新たな形態に向かってゆっくりと静かに成熟してゆく。

《註釈》 形成陶冶 Bildung については、第28節と第29節で詳密に語られている。そこでは、実体が非有機的自然と言い換えられ、また世界の形成もいわれていることから、形成陶冶とは、世界歴史の自覚が、学の生成であることを明らかにするために用いられている。この言葉は、『精神現象学』全体を特徴づけるためにも、また、「精神」の章の「おのれから疎遠になった精神」を特徴づけるためにも用いられる。つぎに自己を形成陶冶する精神は、世界精神、普遍的精神、個人の精神の三つの意味を持ちうる。それに応じて形態も三つの意味を持ちうる。つまり、国家、哲学体系、意識形態である。ここでは、この三者がすべて意味されている。

(6) 精神は既存世界の部分部分を解体してゆく。

löst ein Teilchen des Baues seiner vorhergehenden Welt nach dem andern auf,

精神は、既存の精神世界を組み立てていたもののうち、小さな部分部分をつぎつぎに解体する。

《註釈》 「既存の精神世界」とは、精神が形成陶冶した形態であり、その部分部分の解体が既存形態の崩壊を用意し新しい形態の出現につながる。

(7) 既存世界の崩壊を個々の徴候が暗示している。

ihr Wanken wird nur durch einzelne Symptome angedeutet;

〔そのかぎりでは〕世界の動揺を、まだ個々の徴候だけが暗示している。

《註釈》 既存世界の崩壊がここでは、「世界の動揺」と表現されていて、世界ということで歴史世界を主として意味している。個々の徴候ということで、ヘーゲルが遭遇したイエーナ戦役などのナポレオンによるヨーロッパ諸邦との戦争を意味しているとも読める。

(8) 別の世界への前触れ。

der Leichtsinn wie die Langeweile, die im Bestehenden einreißen, die unbestimmte Ahnung eines Unbekannten sind Vorboten, daß etwas anderes im Anzuge ist.

既存のものに蔓延する軽薄^{けんたう}さと倦怠、未知のものについての漠然とした予感、これらは、何か別の世界が近づきつつあることの^{けんたい}前触れである。

《註釈》 未知のものが接近していれば、漠然とした予感を抱くのはもっともである。しかし、別の世界が接近していると、既存のものに軽薄さと倦怠が蔓延する前触れがあるというのはわかりにくい。ヘーゲルは、イエーナ戦役で荒廃した町を転々としながら感じたのであろうか。

(9) 旧世界の崩壊過程と新たな世界の出現

Dies allmähliche Zerbröckeln, das die Physiognomie des Ganzen nicht veränderte, wird durch den Aufgang unterbrochen, der, ein Blitz, in einem Male das Gebilde der neuen Welt hinstellt.

このゆるやかな崩壊の過程は全体の相貌を変えることはなかった。しかし出現のときに到れば、この過程は打ち切れ、電光石火、一挙にして新たな世界の結構が据えられる。

《註釈》 ここでの「新たな世界」は、今から考えれば、1815年のドイツ連邦を指すことになる。するとゆるやかな崩壊の過程は、1806年の神聖ローマ帝国体制から1815年のドイツ連邦成立までを指すことになる。また、世界という概念は、『精神現象学』では、第1に、偶然性を伴った世界精神つまり歴史的世界でもあるし、第2に、意識の対象としての実体でもあるし、第3に、その実体のなかでも、とりわけ概念的必然性に貫徹された事象ないしカテゴリーでもある。第3の用法については、第1節(5)の註解を参照されたい。

そもそも意識対象は、すべて世界であり、その世界から意識が形づくられる。この点については、「この〔意識経験の〕道程は、概念の運動にはこぼれ、意識の世界性全体を、その必然的連関において包括するであろう」(Phän. S. 27)といわれている。ここに『精神現象学』において「意識の世界性」がきわめて重要な位置を占めていることが示されている。ヘーゲルは、『精神現象学』「力と悟性」の章で、私見によれば、「精神の現象」を「第二の超感性的世界」として示している。そして、その世界は、また「逆さまの世界」(Phän. S. 111)ともいわれている。ヘーゲルが、精神の現象を問題にしたのは、哲学の真理を、常識的世界に求めるのではなくて、それを逆さまにした世界に求めたからである。常識

的世界を逆さまにすることによってこそ、自然的意識の棲みついている常識の世界のたてまえの裏側に隠された真相がよく見えてくるのである。ヘーゲルは、『哲学批判雑誌』第1巻を1802年に発刊するにあたって書いた序説で、通俗的な常識についてこう評している。「哲学の世界は、常識との関係ではまったく逆さまの世界である」(GW4, S.125)というのである。つまり、通俗的常識の世界では、正立しているはずの事柄が、哲学の世界では反転して逆さまになっているというのである。いま、このようなことを述べたのは、『精神現象学』という書名のなかの「精神現象」というのは、まさに、この「逆さまの世界」にほかならないからである。

してみれば、『精神現象学』の世界は、先述の「世界」の第2、第3の意味で、第1の意味での歴史世界に先行することにもなる。それは「学への道」の意味である。

《第12節》

(1) 新たなものはまだ完全に現実になっているわけではない。

Allein eine vollkommene Wirklichkeit hat dies Neue so wenig als das eben geborene Kind; und dies ist wesentlich nicht außer acht zu lassen.

しかしこの新たなものは、生まれたばかりの子どもと同じく、まだ完全な現実性をそなえているわけではない。そして、この点は本質的なことであり、見のがされてはならない。

《註釈》ここでの「この新たなもの」とは、第11節(9)の「新たな世界の結構」のことであり、「生まれたばかりの子ども」にも喩えられる。そして、それは、(2)では、「新たなものの概念」とされて、「完全な現実」とは区別されている。結構という点では、子どもにも成人にも、五体がある点では同一であるが、たとえば、大人が手足を使ってできることを「生まれたばかりの子ども」はまだできないのである。

(2) 登場したばかりの新たな世界は、まだ、その概念でしかない。

Das erste Auftreten ist erst seine Unmittelbarkeit oder sein Begriff.

新たな世界が登場したばかりの段階は、やっとその直接的なあり方でしかなく、いいかえれば、その概念であるにすぎない。

《註釈》ここで登場するのは「新たな世界」であり、それが直接的あり方ないし登場の概念とあるように普遍的な事象として論理的にとらえられようとしている。自己意識の行為の織りなす歴史的世界が、『精神現象学』で叙述される普遍的な事象としての世界へと変換される次第については、つぎのように考えられる。まず、(1)個々の「出来事」としての「事象」は、先述のように、一定の時と場所、人物、個々の目的、手段、現実の連関からなる事態である。そして、これにもとづいて、(2)普遍的な事象として把握された「事象」は、目的、手段、行為そのもの、現実態からなる事態である。(3)「事象そのもの」とは、(1)の「出来事」が、(3)の普遍的な事象であるための根拠ないし本質である。

ここで、(1)(2)(3)の関係について「人倫態」の「神々の掟」を例にして説明してみよう。この掟は、家族成員の中で、「敬愛」(Pietät)を通じて成り立つ種々の義務として現れる。たとえば、埋葬も義務と見なされ(*Phän.* S. 295)、アンティゴネー(妹)は、これに従ってポリュネイケス(兄)を埋葬しようとする。そのことを分析するとつぎのようになる。

(a) 個別的な出来事としての事象

時と場所

個々の状況…ポリュネイケスの遺骸が埋葬されずに放置される。

個々の目的…ポリュネイケスの遺骸に土をかける。

個々の手段…アンティゴネーが自ら細かい砂などを密かにかける。

個々の現実…ポリュネイケスの遺骸に土がかけられている。

(b) 普遍的なこととして把握された事象

状 況…敬愛すべき兄が人間の法に従って罰せられて放置される。

目 的…埋葬の義務の実行

手 段…妹が自ら埋葬の義務という「意識の運動」を付加して、兄の遺骸を自然の破壊から離す。

現 実…埋葬の義務の成就

この(a)が(b)であることがいえるためには、(b)の義務の対象的本質が「人倫的實在」としての「事象そのもの」であることが基底になければならない。そもそも、ヘーゲルによれば「掟」の存在性格は「実体」(*Phän.* S. 310)あるいは「現実態」(*Phän.* S. 285)である。また「普遍的我」(*Phän.* S. 235)でもあるのは主観によってとらえられた本質としての「思想的想念」である「掟」は本来的に行為によって存在として現実化されていることを含意している。そして、ヘーゲルのいう「世界」というものも、そのような場面で成り立っている。この「世界」の三つの意味については、第 11 節(9)を参照されたい。

(3) 全体の概念は全体の基礎であって、全体そのものではない。

Sowenig ein Gebäude fertig ist, wenn sein Grund gelegt worden, so wenig ist der erreichte Begriff des Ganzen das Ganze selbst.

基礎が据えられたからといっていっばしの建造物が完成されたわけではないように、全体の概念に到達したからといっても、それは全体そのものではない。

《註釈》 概念を建造物の基礎(Grund)に喩えるのは、適切とはいえない。なぜならば、ヘーゲルは、序説第 24 節(2)でフィヒテのいう根本命題(Grundsatz)を、自己否定を含まないということで否定しているからである。むしろ、概念を植物の種子に喩えている場合の方が適切である。なぜならば、概念の自己否定が種子の自己否定としての芽に対応するからである。

より注意すべきは、哲学の概念としての現在と哲学体系としての未来という図式で、哲学の未来に重点を置いていることである。この点は、過去を振り返る『法哲学』とは異なっている。

(4) 榿の木のかわりに榿の実を見せられても満足しない。

Wo wir eine Eiche in der Kraft ihres Stammes und in der Ausbreitung ihrer Äste und den Massen ihrer Belaubung zu sehen wünschen, sind wir nicht zufrieden, wenn uns an Stelle dieser eine Eichel gezeigt wird.

榿^{かし}の木がたくましい幹を立て、大枝を張りひろげ、緑の葉を繁らせている様子を見たいと思っているのに、そのかわりに榿^{どんぐり}の実を見せられてもわたしたちは満足しない。

《註釈》 ここでは、哲学の概念が榿の実に喩えられており、哲学体系が榿の木に喩えられている。これは、植物という生命体による喩えであるから、建築の喩えよりは適切である。その理由は、(3)でのべたように、自己否定を生命体が備えている点にある。また、生命体が内在的目的を備えていることにもある。内在的目的と自己否定を備えた概念が、ここでは、榿の木を目的として備えている榿の実に喩えられている。そして榿の木を実現することによって、榿の実は、榿の実に自己還帰する。そのような概念の運動が主体と呼ばれているわけであり、アリストテレスの不動の動者と重ねられている。

(5) 学のはじめが完成ではないのも同様である。

So ist die Wissenschaft, die Krone einer Welt des Geistes, nicht in ihrem Anfange vollendet.

そのように、精神の世界の冠である学も、そのはじめにおいては完成していない。

《註釈》 ここでは、精神の世界の教養形成が榿の成長に喩えられ、榿の木の樹冠と重ねるために、学を冠に喩えている。ここでの学が『精神現象学』を含む学の体系なのか、「学への道」としての『精神現象学』に続く「学の体系・第2部」なのかは、「精神の世界」の意味に依存する。『精神現象学』では、「精神の世界」は、意識の諸形態でもある世界の諸形態を指している。たとえば、S. 384, Z. 32; S. 416, Z. 12 の用例を参照されたい。そして、それは、S. 320, Z. 27 より、精神的实在であり、自己意識の所業であるがゆえに事象そのものである。そして、それが、S. 23, Z. 1 より、普遍的精神の形成陶冶の各段階となって、『精神現象学』において学的に叙述される。

(6) 新たな精神のはじまりは、所産であり、報酬である。

Der Anfang des neuen Geistes ist das Produkt einer weitläufigen Umwälzung von mannigfaltigen Bildungsformen, der Preis eines vielfach verschlungenen Weges und ebenso vielfacher Anstrengung und Bemühung.

新たな精神の始まり、それは、形成陶冶のさまざまな形態から成る広大な変転をかさねてきた過程の所産であり、いくえもの紆余曲折^{うよきょくせつ}と、たび重なる努力や労苦とを経て得られた報酬である。

《註釈》 「形成陶冶のさまざまな形態から成る広大な変転をかさねてきた過程」と「いくえもの紆余曲折^{うよきょくせつ}と、たび重なる努力や労苦」とは、世界精神と学についていわれている。したがって、ここでの「新たな精神」は世界精神である。なぜならば、形成陶冶は、学を樹冠とする世界精神の歴史的過程のことだからである。したがって、学は、過去の精神の所産であると同時に新たな精神の始まりでもある。

(7) 始まりは、全体の生成した単純な概念である。

Er ist das aus der Sukzession wie aus seiner Ausdehnung in sich zurückgegangene Ganze, der gewordene *einfache Begriff* desselben.

その始まりは、この経過と拡散とから自分に立ち返ったばかりの全体であり、全体ではあっても生成した単純な概念である。

《註釈》 この始まりは、学的体系の始まりであり、より具体的には『精神現象学』の始まりである。当該の節で用いられている精神という語句が、世界精神であるのか、その自己知としての自己意識的精神であるのかが明言されておらず渾然となって、精神の形成陶冶になっている。全体とは世界精神の一時代であり、「生成した単純な概念」とは、『精神現象学』の始まりとしての知にとっての「直接的存在」である。

(8) 世界精神の諸形態が新たな場面で意識の諸形態となる必要がある。

Die Wirklichkeit dieses einfachen Ganzen aber besteht darin, daß jene zu Momenten gewordenen Gestaltungen sich wieder von neuem, aber in ihrem neuen Elemente, in dem gewordenen Sinne entwickeln und Gestaltung geben.

しかし、この単純な全体が現実性を得るためには、いまでは〔この全体の〕諸契機となっているさまざまな形態化が、ふたたび新たに、ただし自己の新たな場面において、すなわち生成してきた意味において、展開され、形態化されることが必要である。

《註釈》 ここでは、二種類の形態化が語られている。前者は世界精神における形態化であり、後者は、意識の諸形態である。世界精神における形態化については、『精神現象学』第 28 節が示唆を与えている。ヘーゲルは、世界精神を普遍的個人と特殊的個人という観点から考えている。「普遍的個人においては、具体的形式と固有の形態化を備えているすべての契機が現れる。しかし、特殊的個人は不完全な精神であり、具体的形態である。そして、一つの規定態にその形態の全定在が属していて、他の規定態はかき消された状態で現存している」(Phän. S. 22)。したがって、世界精神の形態化も、二種類ある。さらに、これらが『精神現象学』にあって意識の形態として繰り返される。

《第 13 節》

(1) 新たな世界の出現と意識

Indem einerseits die erste Erscheinung der neuen Welt nur erst das in seine *Einfachheit* verhüllte Ganze oder sein allgemeiner Grund ist, so ist dem Bewußtsein dagegen der Reichtum des vorhergehenden Daseins noch in der Erinnerung gegenwärtig.

一方で、新たな世界がはじめて出現したとき、全体はその単純状態のなかにやっと包みこまれているだけで、やっとその全体の一般基礎でしかない。他方でそれとは対照的に意識にとっては、以前の生活

の富が彷彿となお思い起こされている。

《註釈》 当該文は、『精神現象学』と時代との関係を定式化している。すなわち、旧世界全体は、新世界全体の一般基礎であり、そこから新世界が分裂して展開する。それとは対照的に、『精神現象学』は、意識経験の場面で、旧世界全体を生活の富として彷彿と思い起こす。その思い起こしが学の体系第1部となる。こうして、『精神現象学』は、旧世界全体を体系化することによって、同時に新世界の一般基礎を体系化している。『精神現象学』は、時代の過去と未来の両面に向けられている。『法哲学』序説の「世界の思想としての哲学」という有名な規定は、時代の過去に向けられた哲学の面だけを説明している。「世界の思想としての哲学は、現実がその形成過程を完了し、みずからを完成し終わった後に、はじめてあらわれる」(GW14, 1, S. 16)。現実の形成過程の完了は、同時に新しい現実の誕生でもある。ところで、ここで判明したことは、意識による旧世界全体の想起という性格が『精神現象学』にあることである。「現象とは生成消滅にほかならないが、この生成消滅そのものは生成も消滅もしない。むしろ、それ自体として存在し、真理の生命の現実となり運動となっている。こうして、真なるものは、乱痴気騒ぎの陶酔であって、それにあずかるかぎり、だれも酔わない人はいない。そして、そのなかのある人が、ときとしてその陶酔から離れる場合にも、同じく、たちまちまた融けこんでしまうから、その陶酔は、透明で単純な静止でもある。このような真理の運動による裁きにあえば、個々の精神形態も特定の諸思想も、いかにも、よく持ちこたえうるものではない。けれども、それらは、否定的で消え去ると同様に、肯定的で必然的な諸契機でもある。——運動のなかで区別され特殊な定在を与えるものは、運動の全体が静止ととらえられる場合、この全体にあって想起されるものとして保存される。そして、その定在は、自分自身についての知である。それは、この知が直接的定在であると同様である」(Phän., S. 35)。個々の精神形態や特定の諸思想は、現実のなかで生成消滅するが、『精神現象学』のなかでは、その生成消滅運動の全体が想起されて静止ととらえられる場合には体系の一契機となる。

(2) 新たな世界の形態内容は、現象したばかりでは部分部分へと展開されていない。

Es vermißt an der neu erscheinenden Gestalt die Ausbreitung und Besonderung des Inhalts; 意識は、新たに現象している形態では内容の展開と特殊化がなされていないのに気づく。

《註釈》 意識経験の世界は、また、精神の想起である。世界の諸形態が想起によって現象する。形態としての世界は、現実の歴史的世界とは、区別され、意識の対象である。しかも、ここでは、想起によって新たに現象した対象世界であり、それに相対する意識も現象する。したがって、その対象世界は、これから意識の自己吟味によって特殊的な諸契機として展開されることになる。自己吟味は、そのことに気づくところから始まる。なお、世界の用法については、第11節(9)で解説され、形態の用法については、第12節(8)で解説されている。

(3) 悟性形式による訓育欠如も不満である。

noch mehr aber vermißt es die Ausbildung der Form, wodurch die Unterschiede mit Sicherheit

bestimmt und in ihre festen Verhältnisse geordnet werden.

しかしそれ以上に意識が不満とするのは、ものごとの区別を明確に規定したり、それらの区別項を秩序づけてしっかりと関係づけたりと、形式によって訓育していないことである。

《註釈》ここでの「形式」は、理性の前にある悟性段階の形式である。したがって、訓育も普遍の場面にゆく前であって特殊専門的なのである。カントに即していえば、直観形式によって個々の直観内容を区別し、さらにそれをカテゴリーの形式によって言語普遍的に秩序づけ概念にする。そして、それらの秩序づけられた概念を判断によって関係づけるわけである。それは、また、ヘーゲルのいう主体の二番目の意味である純粹否定性の段階である。つまり単純にして単一なものが区分されて分裂することなのである。第 32 節でも「区分する働きは、悟性の力にして労苦である」と肯定的に評価している。

(4) 悟性形式の訓育で哲学を普通に理解して共有できる。

Ohne diese Ausbildung entbehrt die Wissenschaft der allgemeinen *Verständlichkeit* und hat den Schein, ein esoterisches Besitztum einiger Einzelner zu sein;

形式による訓育がないと、学を普通に理解するということがなくて、一部の個々人が秘匿して所持しているかのように見られることになる。

《註釈》ここでの「理解」は、なるほど、概念的ではなくて、悟性的である。しかし、悟性的理解によって、まずは、哲学を一部の個々人が秘物のようにして所持するということがなくなる。哲学の悟性形式を修得すれば哲学内容をだれもが知的財産として共有できる。ただし、その修得のためには、悟性形式の訓育が必要となる。訓育は、専門教員による教育を必要とするから、哲学科ないし哲学学校を必要とすることになる。ヘーゲルが、中高等教育における哲学教育を重視したのもこのような点に関連している。

しかし、ここでの悟性的理解つまり普通の理解というのは、「認識すること (erkennen)」から区別された「よく知られること (bekannt machen)」にほかならない。

(5) 学の内概念は秘物のように所持される。

— ein esoterisches Besitztum: denn sie ist nur erst in ihrem Begriffe oder ihr Inneres vorhanden;
秘物のようにして所持すると見られるのは、学がやっとその概念において存するだけで、やっと学の内なるものしか眼前にないからである。

《註釈》学の内概念は実現されることになり、学の内なるものは、外面化することになる。概念は、一本の植物の種子の譬えることができる。

(6) 学は、現象して展開されて普通に理解される。

einiger Einzelner: denn ihre unausgebreitete Erscheinung macht ihr Dasein zum Einzelnen.

一部の個々人のものとして見られるのは、学は、現象しても展開されずにあるかぎり、個人用にしか

現存しないからである。

《註釈》 ここで、学は、現象し、展開することによって、普通に理解されることが示されている。それが学への道である。しかし、それが同時に学であるという点で認識されることも含んでいる。

(7) 悟性的規定が公教的で概念把握可能で学習可能となる。

Erst was vollkommen bestimmt ist, ist zugleich exoterisch, begreiflich und fähig, gelernt und das Eigentum aller zu sein.

完全に規定されているものであってはじめて、それは同時に公教的であり、概念把握されることができ、学ばれて万人が所有しうる。

《註釈》 ここから、普通の理解が問題となるのは、意識の経験の場面であり、概念把握の場面たる学の前に当たる。

(8) 学への道は悟性的形式をとる。

Die verständige Form der Wissenschaft ist der allen dargebotene und für alle gleichgemachte Weg zu ihr,

悟性的に理解される形式を学がそなえることは、学にいたる道を万人にひらき、万人のために均すこととなる。

《註釈》 ここから、学へ道としての意識の経験の道が、学のそなえる形式であり悟性的であることが判明する。

(9) 理性的な知は、悟性を經由する。

und durch den Verstand zum vernünftigen Wissen zu gelangen, ist die gerechte Forderung des Bewußtseins, das zur Wissenschaft hinzutritt; —

そして、学をこころざす意識が、悟性を經由して理性的な知に達しようとするのは、正当な要求である。

《註釈》 ここから理性的な知が学による概念把握を指していることがわかる。

(10) 意識は悟性的に思考する純粹我一般である。

denn der Verstand ist das Denken, das reine Ich überhaupt;

なぜならば悟性とは、思考することにはほかならず、純粹我一般なのだからである。

《註釈》 ここでの思考は、思弁的思考ではなくて悟性的思考である。

(11) 悟性的理解は、「すでによく知られていること」につづく。

und das Verständige ist das schon Bekannte und das Gemeinschaftliche der Wissenschaft und

des unwissenschaftlichen Bewußtseins, wodurch dieses unmittelbar in jene einzutreten vermag.

悟性的な理解は、すでによく知られていることにおいて成り立ち、それが学と非学的意識とのあいだの共通項をなし、それを通して意識はただちに学に踏み入ることができるのである。

《註釈》 ここから、非学的意識にとっての「すでによく知られていること」→非学的意識と学とのあいだの共通項としての「悟性的理解」→「われわれ」にとっての学という過程が判明する。この過程が形成陶冶の過程に占める位置については、第 4 節註解(1)を参照されたい。それによれば、自己意識の精神の形成陶冶は、①定在を揚棄し、それを表象（よく知られているもの）へと変え、②さらに、この表象を分析し、「固定した思想規定」という諸要素にまで到らしめる。そして、③そういう諸要素を流動化させ概念にする。この過程のうちで①の段階はすでに古代で実現しており、『精神現象学』の叙述が従事するのは②と③の段階なのである。その際、「序説」はこの①と②を媒介するのである。悟性的理解の場面は、②に対応する。

註

本文中における筆者による補足は、〔 〕で括り、ひとまとまりの表現は、〈 〉で括った。原文隔字体は、圏点を付けて表示した。

(1) 以下に『精神現象学』「序説」執筆時の関連年譜を掲げておく。

〈1806 年〉

- 10月 1 日 プロイセン、ナポレオンに最後通牒を通告する。
- 3 日 ニートハンマー、ゲーテと交渉の結果を知らせ、『精神現象学』原稿の最終締め切りは 18 日であり、13 日には原稿を必ず送るようにと促す。
- 6 日 ニートハンマーあてに手紙を書き、彼のおかげで問題の決着をみたことを感謝し、全原稿を今週中に発送することを約束する。
- 7 日 ナポレオン、プロイセンに宣戦布告。
- 8 日 ニートハンマーに返事を書き、彼の仲介を英雄的と評価し、残り原稿の前半部分を同封 10 日に残り後半を送ると約束する。
- 10 日 残り原稿の後半部分の大半をニートハンマーあてに発送する。
- 12 日 この日から 13 日にかけて残りの原稿を完成するが、送ることができず。ニートハンマーに手紙を書き、原稿が届いているかどうかを心配し、世界精神たる皇帝ナポレオンが馬上豊かに街をでてゆくのを見たことと知らせ、「この人を驚嘆せずにはいられない」と述べる。困窮しており、政府委員の家に宿泊していると書き添える。夜、大火がおきる。
- 13 日 フランス軍、イエーナ占領
- 14 日 『精神現象学』の最後の原稿をポケットに入れ、イエーナ大学副学長ガブラー家に避難する。彼の息子で後のヘーゲル後継者、ゲオルク・アンドレアスがヘーゲルのために小部屋を整える。しかし、数時間後、フロマン宅に移動する。
- 18 日 ゲーテ、イエーナの友人たちに回覧状を送り、彼らに異常はないかどうか調べる。ニートハンマーに手紙を書き、ゲーテがちょうど今、回覧状をくれ、災害を免れて彼も無事であることを知らせ、フランス軍主力はイエーナを去り、20 日には郵便が再開されるので最後の原稿を送ると約束、重ねて窮乏を訴える。
- 24 日 ニートハンマーに、街が少し平穏な状態に戻ったと書き送る。
- 28 日 ゲーテ、クネーベルに、略奪を受けて困窮しているヘーゲルに 10 ターレルまで与えるように

と指示する。

11月半ば年末までバンベルクに避難し、校正と序説の執筆に専念する。この年の始めから末にかけて現象学と論理学のための講義草稿を書く。

〈1807年〉

1月1日 ハイデルベルク物理学協会、ヘーゲルを名誉会員に任命する。

3日 イェーナよりシェリングに手紙を書き、去年の復活祭から著作を献呈できればと望んでいたが、今年の復活祭には「たんに始めにすぎないが、勿論始めにしてはかなり大部」なこの書物を贈ると述べる。

11日 シェリング、ヘーゲルに返事を書き、「君の成熟が果実を実らせるのにまだ時間を要するとすれば、何が生ずることか」と述べて、彼の著作の刊行に大きな期待をよせる。

16日 ニートハンマーに手紙を書き、『精神現象学』の序説をゲーブハルトに発送したことを知らせ、「すぐ続いてでは第2版」で「船をあちこち掃除してもっと底荷を少なくし、ずっと軽快にするようにしたい」、「これをあてにして自分を慰め、人にも我慢してもらいたい」と述べる。ゲーテあてに手紙を書き、植物学教授の空席に触れて、哲学とともに植物学の講義をする用意があると述べる。

（奥谷浩一「ヘーゲル詳細年譜」、『ヘーゲル事典』所収、弘文堂、1997年、643-644頁）

（2） Vgl. *Briefe von und an Hegel*. Bd. 1, Hrsg. v. J. Hoffmeister, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1969, S. 128f.

文献略号

GW: Georg Wilhelm Hegel, *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*. Hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff. (*GW*の後に巻数と頁数を記してある)

Phän.: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H. -F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.